

第2回ヒアリ等防除に関する専門家会合 議事概要

日 時：平成 29 年 9 月 11 日（月）13:30～15:30

場 所：経済産業省 別館 1 階 108 室

専 門 家：

| | |
|-------|----------------------------|
| 岸本 年郎 | ふじのくに地球環境史ミュージアム准教授 |
| 五箇 公一 | 国立研究開発法人国立環境研究所生態リスク評価対策室長 |
| 辻 和希 | 琉球大学農学部・鹿児島大学大学院連合農学研究科教授 |
| 橋本 佳明 | 兵庫県立大学自然環境科学研究所准教授 |

（※ 五十音順、敬称略）

【議事概要】

＜前回会合以降のヒアリ発見状況について＞

- ・空コンテナの国内輸送も追跡した方が良い。アリが外に出ているのはごく一部で、コロニー本体は移動している可能性がある。
- 数が多くすべてを追跡することは難しいが、ヒアリが確認されたコンテナについてはお願いしている。（環境省）

＜同定・防除マニュアル案について＞

- ・二分岐法にした場合、ひとつ間違えるとそこで躓いてしまう。また、HP 等で公開すると、内容によっては市民が誤同定し混乱を招きかねない。公開するならばそれを踏まえて内容を検討しなければいけない。
- ・海外では粘着トラップの効果が低いという報告がある。ヒアリもアカカミアリもベイト（餌）を置いて、粘着剤があると分かると近づかなくなる場合がある。ベイトを置いて短時間でスクリーニングを行う方法に切り替えた方が良い。
- ・野外で繁殖が確認された場合、ある程度高密度にベイトトラップの設置が必要。特にヒアリが活発に活動する春と秋に、多くの労力を投入すべき。
- ・1 匹で飛んで行った繁殖虫が定着する確率は非常に低い。それよりもヒアリの移動範囲内を警戒する方が良い。
- ・ニュージーランドで防除が成功した理由として、ヒアリが見つかった 1 km 圏内は荷物の移動を禁止したこと、さらに 5 km 圏内に毒餌（成虫には効かず、幼虫に効果があるもの）を設置したことが考えられる。ただし、多ければよいということではなく、あくまでモニタリングの精度を上げるのが前提である。
- ・マニュアルの対象を整理する必要がある。また、今までの確認事例を基に、

場合ごとに発見時の対応を整理する必要がある。

→今作成しているものは、行政職員を対象としたものである。事業者を対象としたものは別途作成する必要があると考えている。

- ・マニュアル中で使用している「営巢」、「定着」、「繁殖」等の用語について、しっかりと整理するべき。

<自治体向け講習会>

- ・現場では確認されたアリのヒアリかそうでないかを見分ける能力が必要である。
- ・自治体で独自に講習を行っているところも既にある。まずは、自治体のニーズを把握するべき。

→講習会についてはいくつかの自治体から要望があった。自治体の環境省へのニーズについて把握していきたい。(環境省)

- ・専門的な講習会よりも基本的なものがより必要な状況も多く、対象による伝え方が必要。

<その他>

- ・一次スクリーニングの手法を開発中である。サンプル中のヒアリの在・不在を調べるものであり、ヒアリ以外は検出されない段階まで来ている。

<関係省庁からの報告について>

- ・空港の場合は、滑走路脇の草地でも調査を行ったほうがよい。海外では飛行機が離発着する合間で調査をしなければならなかったためヒアリ探索犬を導入した。

- ・コンテナを仕出しする際に薬剤を入れること、空コンテナへ薬剤を入れることが必要である。常に薬剤をコンテナ内へ入れられるようなルール作りが必要ではないか。

→毒餌を入れておくことに対する人や貨物へのリスク評価が必要。環境省へリスク評価をお願いしているところ。(国土交通省)

- ・コンテナ内にベイト剤設置用ポケット等をつけて、コンテナの一部とみなすことはできないか。あるいはベイト剤設置を前提とした抗菌コンテナのようなものはないか。

→固定具材でないとコンテナの一部とみなすのは困難。コンテナは国際規格 (ISO 規格) なので、規格改訂には国際的議論が必要。(国土交通省)

- ・国内の空港でのヒアリ確認はまだないが、空港から侵入し、定着する可能性は十分あるので、空港でも注意が必要。

<中長期的な対応の考え方について>

- 野外で繁殖（巣、有翅虫）が多数確認された場合は、5 km圏内程度での調査が望ましい。今年度のようにコンテナヤード内のコンクリートの割れ目からだけなら2 km圏内程度で問題ない。
- ヒアリの定着により農作物への大きな被害が予想される。コンテナヤードではよっぽど草が生えていない限り定着する可能性は低いと思う。